

「直人くん、もっと声出していいですよ♡」

「やっ……っ♡あっ♡そんなこと……っ♡」

（昨日、初めて会ったのに。こんなこと、していいはずがない……っ♡）

頭ではわかっていた。わかっているけど、腰は言うことを聞かなかった。

脚を押し広げられたまま、奥まで届く深さで突き上げられるたびに、

「やめて」と言えずにいる。言葉が出てこない。出てくるのは、甘い息と声だけだった。

どちゅんっ♡ばちゅっ♡

「ひあっ♡そこっ……っ♡」

（また、そこ……っ♡ずっと、そこだけ狙ってる……っ♡）

弱い場所を正確に覚えられてしまっていた。腹側の、腰の角度を変えら

れた瞬間に見つかった一点。そこへ届くたびに、頭の奥が白くなる。

どちゅっ♡どちゅっ♡ぐちゅぐちゅっ♡

「あっ♡あっ♡やっ♡そこばかり……っ♡あぁっ♡♡」

「逃げなくていいですよ♡」

「にげてなっ……っ♡あぁっ♡♡」

（逃げてない……逃げられないんじゃないかと、逃げたくなってる……っ♡）



その日は、仕事のない休日だった。昼食を終えた中村直人は、ベッドに寝転び、スマホを胸の上に置いて天井を見上げていた。

外へ出る予定もなく、時間を持て余している。

（せっかくの休みなのに、何もする気が起きない）

何となく開いた刺激の強い動画を眺めているうちに、朝からくすぶっていた体の疼きが、はっきりとした熱へ変わっていった。

予定のない休日だと思うと、無理に我慢する理由もない。

（今日は休みだし……少しくらい）

誰もいない部屋で、Tシャツと下着を脱ぎ、脚を開いて指を滑り込ませた。そこはもう、ほんのりと湿っていた。

（……こんなに、もう）

ぬちゅ♡

「んっ……♡」

一度触れただけで声が出る。自分が人より感じやすいことは、ずっと前からわかっていた。少し触れるだけで腰が動く。指が動くより先に体が反応してしまう。

一人のときはいつも唇を噛みながら手を動かすのに、今日は噛む前に声が漏れた。

（我慢してた分……体が正直すぎる）

指の腹でゆっくりなぞると、割れ目はすでに濡らかに濡れている。指先を沿わせるたびに、下腹部の奥から甘い痺れが走った。

ぐりっ♡くちゅ♡

「ひっ……っ♡ん……っ♡」

(感じすぎ……少し触れただけで)

吐く息が、知らないうちに甘くなっていく。目を閉じると、体の熱だけがはっきりした。朝から溜め込んでいたものが、指先から少しずつほぐれていく。

一本目の指を、奥へ押し込んだ。

ぬちゅう♡

「んあ……っ♡」

体がよく覚えている場所がある。奥まで指を進め、指先を弓なりに曲げると、他の人が感じるという場所よりさらに先に、触れるたびに頭が白くなる一点がある。

自分でもよく知っている場所だった。体はいつも以上に素直で、指先が動くたびに腰が先に反応する。

(そこ……あった……っ♡)

ぐりっ♡

「あっ♡……そこっ……♡」

じん、と頭の奥が痺れた。腰が浮く。止めようとしても、体はもう指先を追い始めていた。

二本目を入れ、弓なりに曲げた指先で弱い一点を押すと、声が出てしまうので唇を噛んだ。噛んでも、鼻から漏れる息が甘い。

ぐりぐり♡ぬちゅっ♡ぐりっ♡

「んっ♡はっ……♡ああ……っ♡」

(だめ……声、止まらない……っ♡)

吐くたびに、少しずつ甘くなった。指が動くたびに腰が浮き、シーツをつかむ手に力が入る。

「んあっ♡あっ♡そこっ……♡」

(もう少し……あと少しで……っ♡)

ぐりぐりぐり♡くちゅっ♡ぐりっ♡

「ひっ……♡ああっ……っ♡もう……っ♡」

息を整えようとするたびに、逆に甘く乱れた。腰が波打ち、体の奥がと

ろとろと熱くなる。

（くる……もうすぐ、くる……っ♡）

そのとき。

ぴんぽん。

インターフォンが、廊下から平坦な音で鳴った。手が止まる。直人は慌てて指を抜き、ベッド脇のティッシュで拭いた。

脱いだ下着を戻す余裕もなく、裸のままベッドを降りる。高まった体にうまく力が入らず、壁へ手をつきながら、よたよたとインターフォンまで向かった。

モニターを確認すると、見知らぬ男が立っていた。

（知らない人だ……）

紺の作業着を着ていて、胸元には会社のロゴが入っている。背が高く、肩には大きなツールバッグを提げていた。

（……何だっけ）

スイッチを押すと、平坦な声が返ってくる。

「防犯カメラの点検でうかがいました。石川大輝といいます」

そこで思い出した。書面のことを、完全に忘れていた。

三日前、管理組合から届いた書面には、マンション内で空き巣被害が相次いだため、防犯設備の緊急点検を行うと記されていた。

被害が続いたあと、管理組合は希望する世帯へ、侵入経路を記録するためのカメラを貸与した。

直人の部屋にも、玄関内側とベランダに一台ずつ設置されている。

点検日時は火曜午後二時から五時の間。在宅が難しい場合は管理室へ連絡を——という内容だった。

その日は仕事が休みだったため、連絡の必要はないと思い、そのまま書面のことで忘れていた。

（来るって、書いてあった……っ！）

直人は一瞬固まった。Tシャツも下着も身につけていない。顔が熱く、指先もまだじんじんしている。

寸前で止めたせいで、体は中途半端に高まったままだった。

（ちょっと待って、着替えないと……っ）

「あの、少しだけ待ってもらえますか」

「はい、どうぞ」

駆け足でベッドへ戻り、脱いだ下着を引き上げる。床に落ちていたTシャツも拾い、急いで頭から被った。

スマホを画面がついたままベッドへ置き、鏡で顔を確認した。頬から首筋まで赤くなっている。

乱れた息を整えようとしても、体の熱はなかなか引かなかった。

（落ち着いた。大丈夫。わかるはずがない）

深呼吸を二回して、玄関のドアを開けた。間近で見ると、モニター越しの印象より少し若かった。二十代後半くらいだろうか。

黒に近い短い髪に、やや細い目。整った顔をしているのに、口元にはどこか軽さがある。

「お待たせしました」

「お邪魔します。石川です。中村さんのお部屋で間違いないですか。玄関とベランダのカメラを確認させてもらいます」

「あ、はい。どうぞ」

直人はドアを大きく開け、脇へ寄った。大輝が部屋へ入ってくる。玄関をくぐった瞬間、大輝は一度だけ直人を見た。

首筋を、視線が上から下へ滑った気がした。ほんの一瞬で、すぐにカメラへ向き直る。

「あー、お邪魔でしたか」

責めるような声ではない。本当に軽い口調だった。

「……っ、そんなことないです」

「否定しなくていいですよ。こっちもびっくりしたし」

それきり直人へは目を向けず、玄関脇のカメラを確認し始める。タブレットを操作し、映像を確かめていた。

直人は奥のソファに腰を下ろした。まだ顔が熱い。大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

大輝の口ぶりは軽かった。何か確信があって言ったわけではない。たまたま、そういう言い方をしただけだ。

（やっぱり、ばれてない）

大輝は手際よく作業しながら、タブレットに点検結果を入力していた。口数は少なく、こちらを見ようもしない。仕事だけをしている様子だっ

た。

「次、ベランダをお願いできますか」

「あ、はい」

ベランダへ向かうには、開いたままの寝室の前を通る。ベッドの上には、画面がついたままのスマホが置きっぱなしになっていた。

直人はそのことに気づかないまま窓を開けた。大輝は持参した靴カバーを履き、ベランダへ出る。

タブレットで映像を確認しながら、カメラの取り付け角度を調整した。動きに迷いが無い。

（終わったら帰る。それだけだ）

そう思っていたとき、大輝が振り返ることなく言った。

「さっき、何見てたんですか」

直人の思考が一瞬止まった。

「……え？」

「スマホ、まだ画面ついてましたよ。ベッドに置いてあるやつ」

返す言葉が見つからなかった。

「動画か何かですか」

「ち、違います」

「じゃあ、何ですか」

「……何でもないです」

大輝はタブレットを操作したまま、直人の方を見ない。

「そうですか」

それだけ言って、作業を続けた。それ以上は追及してこない。直人は小さく息をついた。

（流した。終わった）

作業を終えた大輝が、ベランダから部屋へ戻ってくる。窓際で靴カバーを外すとき、もう一度だけ直人を見た。だが、それだけですぐに視線を外す。

「一つ、確認なんですけど」

「はい」

「この建物、玄関内側のカメラが廊下の奥まで映り込む部屋があるんですよ。取り付け角度がずれていて」

直人の体が強張った。

「この部屋も同じです。玄関から室内廊下まで映っていました。今日、角度を直しますね」

「……はい」

「それと、昨日の映像がカメラ本体の一時記録に残っています」

大輝はタブレットを直人へ向けた。画面には、室内廊下の先へ歩いていく下着姿の直人が映っていた。